＜2021年10月28日（木）＞

ＮＥＷ　！！

郷土を知ろう

越前和紙の里で手漉き和紙工房や名勝三田村家庭園を見学し歴史やアートに触れる

会員５名が、越前市「越前和紙の里」を訪れました。午前中、長田製紙所を訪問し、手すき工房を見学しました。先ず、手漉き和紙の原料や釜場について説明を受けました（写真右）。次に「漉き場」で、実際に墨流しの技法で大判の紙を職人さんが漉いている様子を見せていただきました。

大きな水槽で、素早く色を流しながら紙を漉き、板張りする職人技が素晴らしかったです。その後、ギャラリーで、多様な和紙のアート作品を見せていただきました。外国からも注文がくるそうで、建築や現代アートにもフィットするモダンで個性的な和紙作りに取り組んでいるそうです。

昼食は、国登録有形文化財で、朝倉義景なども愛用した茶室(対碧亭)がある寿屋で、和食懐石を美味しくいただきました。

午後は、中世以来紙漉きを生業としている三田村家を訪問しました。越前守護であった斯波氏に献上した杉原紙が良質な紙であることから、「奉書」と名付けるように申し渡され、これが越前奉書の名の始まりとなったそうです。その後も、奉書印(特別に紙束の紐に押す印判)を許可されたそうです。織田信長からは七宝印、豊臣秀吉からは桐印を許可され、江戸時代には、初代藩主結城秀康から奉書氏職を安堵され、幕府の御用紙職の地位も得たとのことです。現在も残っている幕府への上納品を納めた葵御紋黒革覆付行李や、江戸に納める際の荷に目印としてつけられた葵御紋御用札（写真右）などの貴重な文化財を見せていただきました。福井では、中世から紙漉きが盛んに行われていたと初めて知りました。また、国指定の名勝「三田村氏庭園」を絵図と照らし合わせながら鑑賞しました。

今は、手漉き和紙を作っている工房が減少しているそうですが、これからもこの紙漉きの伝統を絶やさず、受け継いでいってほしいものです。